

■学校経営のポイント

1ヵ月点検

喜名 朝博

大型連休明け、学校に行きたくないという気持ちを抱く子は少なくない。そんな気持ちを払拭してくれるのが同僚の存在である。早く同僚に会いたいという気持ちが背中を押してくれる。学級が安心できる居場所になっていけば、子どもたちの気持ちは安定し、同僚に会うことが登校の目的になる。子どもたちにとって、学校は勉強するところというよりも、同僚に会える場所なのである。

心理的安全性と子どもたちの関係性の確認

マズローの欲求段階説では、生理的欲求や安全の欲求といった基本的な欲求の先に、社会的欲求や承認欲求、自己実現欲求といった精神的欲求があると説明する。学級の心理的安全性が保たれていけば、その学級に所属したいという社会的欲求が高まり、同僚を求めようとする。逆に、安全の欲求が満たされなければ、孤独感や不安を抱くようになり、気持ちは学校から離れていく。

新しい同僚との生活が始まって1ヵ月、学級の心理的安全性は保たれているだろうか、子どもたちの関係性は良好だろうか、再確認しておこう。

自己の変容に目を向けさせているか

承認欲求とは、所属する集団の中で認められたい、評価されたいという欲求である。親や教師、同僚から認められたいという思いが原動力になって子どもたちは努力を続ける。さらに、この過程で様々なことを学んでいくことになる。

ここで気をつけなければならないのは、他者からの評価を気にしすぎる子どもたちの存在である。過度に評価を求める子は、自分が見えなくなり、自信を失っていく。評価欲求を満たしつつも、他者との比較ではなく、自分自身の変容(個人内評価)や多様な価値観に目を向けていくようにしていきたい。

水平比較はできているか

心理学者フェスティンガーの社会的比較理論によれば、人は正確な自己理解のために他者と比べて自分の能力や考えを評価しようとすると言う。子どもたちの同僚意識が高まってくると、勉強や運動、リーダーシップや性格など、様々な視点で自分と同僚を比較するようになる。

このとき、自分より優れている同僚と比較し、もっと頑張ろうと思うのが「上方比較」である。逆に自分よりも劣っている同僚と比較し、自分の方が上だと捉えるのが「下方比較」である。どちらも過度になると、劣等感や自己嫌悪、優越感や排除意識をもつようになる。さらに、それが伝播すれば同質性を保つための圧力になっていくこともある。現代社会のSNSに関わる問題の本質はここにある。

学級経営においては、上方比較でも下方比較でもなく、「水平比較」が必要である。すなわち、能力の優劣ではなく、互いのよさや努力していることを認め合うことである。協働的な学びに代表される学び合い、体験的活動等の充実による子どもたち同士の関わり合いの深さがポイントとなる。

いじめの芽はないか

上方比較による劣等感が相手への攻撃に発展したり、下方比較による差別意識が相手を見下したりすることにつながるなど、他者との過度な比較はいじめや偏見の原因になることもある。どちらも合理性のない偏見であることをしっかり説明するとともに、前述の「水平比較」と「個人内評価」を徹底し、いじめの芽を摘んでいきたい。

先生方もきっとお疲れです。メンタルとフィジカルの1ヵ月点検をしておきましょう。

(きな・ともひろ=国士舘大学教授/全国連合小学校長会顧問)

法規から実務まで学べる 学校管理職の教科書

宮澤一則【著】 四六判/定価 2,310 円

■本の詳細の確認およびご注文は、右QRコードより小社ホームページをご利用ください。

